

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No.119 2021年6月18日発行



チェルノブイリ 35 年・福島 10 年救援イベント
豊田直巳 講演会 「チェルノブイリから福島」
～原発災害をどう記憶し、心に残し、震災後をどう生きるか～



4月24日、オンラインによる講演会を開催。175名の方が参加されました。後援の「生活協同組合パルシステム東京」様には、講演会の宣伝、申込受付、当日の撮影、YouTubeへのアップまで、大変お世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

★講演会を YouTube でご覧いただけます（詳細は9頁）。



「菜の花がきれいに咲いている中を、お神輿が担がれていく、行列が歩いていく。でも実際には菜の花の向こう側には、放射性汚染土が山積みされているんです」

（本文8頁より）

撮影 豊田直巳 2018年5月3日飯館村



子ども基金から贈られた医薬品を受け取る兄妹。ベラルーシ・ゴメリ市（本文14頁） 2021年2月



チェルノブイリ35周年のこの春、ベラルーシ「ナデジダ」では子どもの絵のコンクールを開催（本文16頁）。左は作品を手にする子ども。右はモギリョフ州の村から来たA・ゼムツェフ君（13歳）の作品。



～～ 本号の目次 ～～

p.2～9 豊田直巳講演会

p.10～11 質疑応答

p.12～13 報告：未来の福島子ども基金、
チェルノブイリ子ども基金

p.14～16 チェルノブイリ事故から35年
現地からの便り

p.17 チェルノブイリの歌声

p.18 里親のページ p.19 募金・救援状況

p.20 事務局から

はじめまして。豊田直巳と申します。2011年3月の福島原発事故は、チェルノブイリ原発事故から25年の取材を終えて帰国した直後に起こりました。その中で、さまざまな悔しい思いを感じてきました。それが今も福島取材を続けている大きな理由です。

<イラクからフクシマへ>

2003年にイラク戦争がありました。そのイラク戦争の前からイラクには通っていました。そのさらに13年前、1991年に湾岸戦争というのがあり、そこではじめて劣化ウラン弾という放射性物質を兵器にしたものがイラクの地にばらまかれました。その地でたくさん子どもたちがガンや白血病にかかっているという話が聞こえてきて、取材をしていました。

そうしたなかで2003年、イラク戦争が起こってしまった。そのときはずっとイラクにいたので、現場で爆弾による直接の被害者取材することが多々ありました。そしてアメリカ軍がイラクに勝ったということで占領軍となって入ってきた。日本のテレビなどを見て、イラク解放、サダム・フセインの圧政からの解放という側面を感じていた人もいるかもしれませんが、これは間違いなくアメリカ軍・イギリス軍がイラクを占領していく姿でした。

今回の戦争でも劣化ウラン弾を使ったということで、その痕跡を一つひとつ調査・取材していきました。自衛隊がサマワというところに派遣されました。日本の報道によると、自衛隊が派遣されたのはイラク戦争が終わった後かのようなニュア



ンスもありましたが、それはまだまだ戦争が行われている最中のことでした。壊れた高射砲が放置されていたので、放射線測定器を当ててみると、3マイクロシーベルト、4マイクロシーベルトという数値が、劣化ウラン弾が当たったところでは測れる。そのサマワでも異常出産が続いていると、お医者さんたちは話していました。そういう取材をしていくなかで、劣化ウラン弾が使われたところには同様の問題がいっぱいあるということを知っていきました。

<イタリア～セルビア～サラエボ～コソボ>

イタリアの兵士であったお連れ合いのステファノさんを亡くされた奥さんとその娘さん。夫（父）はNATO（北大西洋条約機構）軍が劣化ウラン弾を使用しているとは知られずに旧ユーゴの戦争に参加して被ばくし、病気になって死んでしまった、と訴えていました。

ではその旧ユーゴはどうなっているか。劣化ウラン弾をあつめた倉庫です（2007年）。セルビアの山では戦争が終わって10年たっても、地道に放射線を測定して劣化ウラン弾を捜索・回収するという作業が続けられていました。山は麓にある村の水源になっているからです。1個289グラム程の小さな劣化ウランの塊である弾丸を扱うのに、こんなに大がかりな装備をしていた。ただイラクの子どもたちは、そんな危険なものだとは知らされていなかったのだから、触って遊んでいました。

これは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ。首都のサラエボには、戦争から10年余を過ぎても、街中に残されたままです。劣化ウラン弾が突き刺さったところでは1.19マイクロシーベルト。コソボの地でもNATO軍が介入した際に使われました。

その放射線測定器をまさか、飯館村で使うようになるとは思いませんでした。イラクでは劣化ウラン弾が当たった周辺では3マイクロシーベルトとか4マイクロシーベルトという数値が出るのですが、福島の汚染地帯では、どこでもそういう数字が出てきます。つまり劣化ウランを取材していたときには、ピンポイントで汚染されている

ものがあるというのに対して、福島は面として汚染されてしまった。

<2007年7月 中越沖地震と原発>

2007年には柏崎刈羽原発が地震で壊れました。同じ東京電力の原発ですね。原発敷地のなかでも液状化というか土地がたわんで地盤沈下していました。地震が起きれば原発だけが壊れないわけではなく、当然壊れるし、水も漏れる。おまけに大きなコンデンサーが火を噴いたけれども、消火栓が使えず火を消すこともできない。

原発のずさんさは、ずっと指摘されていましたね。原発の中がずさんであれば外もずさん。「原子力災害時集合場所」というのは一応用意されていて、後に福島でもいくつも見ましたが、倒壊の危険ありということで「要注意」と貼り紙がしてあって、建物に入ることはできない。これじゃあ避難場所にならないですよ。

これが2007年ですから、このときに私たちが原発を止めていけば福島の事故は無かったのかと思うと、私は何をしてたんだろうと。

<2011年 チェルノブイリ 25周年>

10年前には25年ということで、ある公共放送のテレビ番組で放映する予定でチェルノブイリに取材に行っていました。事故から25年たつとこうも町も村も消えていくのか、崩壊していくのかという姿を見てきました。で、それが正に日本で起こってしまった。25年後にはこうなるんじゃないかというのを、タイムマシンか何かで見てきたような気になって、福島に向かいました。

<2011年3月12日～ 福島取材>

震災の翌々日、13日の朝、双葉町に入って目に入ってきたのは、JR常磐線の線路が落ちていた姿でした。19.99マイクロシーベルトで針は振り切れてしまっています。役場に行ったら、取り残されたおじさんがいました。

すぐ近くの双葉厚生病院では、慌てて避難した様子がまだ見られました。ストレッチャーとかベッドが散乱していました。病院から1キロ半くらいのところに双葉高校というのがあって、そのグラウンドから自衛隊がヘリコプターで救出するというので、放置されたのだと思います。

病院建物の中に入ると、コンクリート造りなのに、2日後の朝ですら測定器の針は振り切れてしまうような状況。玄関口の外で測ったら、1時間当たり1ミリシーベルト（1000マイクロシーベルト）まで測れる機械まで振り切れてしまう。

でも政府はこの時点では、この数字を発表していなかったんですね。双葉厚生病院の患者さんたちは丸々1日、あの冷たい日に、高校の教室でヘリコプターが助けにくるのを待たされていたんです。だから避難先でバタバタと亡くなっていくという悲劇が起こった。

つまり避難なんてそう簡単にはできないわけですね。避難命令は出たといっても、現実には動けない人たちが何人もいた。そういうことを、政府の発表とは別に、ジャーナリズムがやらなくてはいけないと実感しました。

<3月29日～ 飯舘村と今中調査団>

京都大学原子炉実験所の今中哲二先生に同行して、私ははじめて飯舘村に入りました。今中さん



の調査では、飯舘村はどこも 10 マイクロシーベルトを超えていた。水がきれいで豊かな村なんですね。多くの方々は井戸水、あるいは簡易水道で間に合っていた。ところが、そこから放射性ヨウ素が検出されてしまい使用禁止となったので、役場の職員の人たちが放射能に汚染されている村内を回って飲料水を配っていました。25 とか 26 マイクロシーベルトもあるとあって、今中先生すら驚いていました。数えきれないくらいチェルノブイリの放射能汚染地帯を調査してきた学者が、「日本で日本でこういうことが起こったのか」「現実のものとは信じられない」と言っていたのを鮮明に覚えています。

こちらは当時の村長、菅野典雄村長です。去年の 10 月に退任するまでずっと村長でした。今中さんはその村長に状況、概略を説明しました。村の中には空間線量率 20 マイクロシーベルト、30 マイクロシーベルトの場所がある。それは東京の 100 倍とか 150 倍の数値で、とても人が居ていいようなところではないんだ、と。

そうすると菅野村長の方は、「じゃーどうやったら居られるんだ？」と。だったら逃げまじょうでも、どうやったら逃げられるかでもなく、逃げないためにはどうしたらいいんだ、と。それはそのまま日本政府の方針、県の方針と合致します。3 月末時点のこの時にはすでに、事故対応として経産省から村役場に派遣された職員がいました。

一方偶然ですが、村の職員にはすごい人がいたんですよ。杉岡誠さんといって、東京工業大学の核物理学の大学院を出たお坊さん。このときは放射能測定の担当になっていました。だから今中さんもみんな期待したんです、彼が放射能汚染対策をやればいいと。ところが彼は担当を外され、農政課に回されてしまいました。

その彼がなんと去年の 10 月に村長になった。だから、今後について僕は期待しています。ただこの 10 年、「復興」という名の下で、復興予算に頼らざるを得ない体制になってしまったので、そう簡単なことではありませんが。

話は戻りまして、そういう村にも子どもたちは残っていました。福島県の放射線健康リスク管理

アドバイザーとして長崎大学の高村昇さんなどが赴任し、「少しぐらい子どもたちが外で遊んでも大丈夫だよ」というようなことを言うてしまう。原子力の専門家として。危険だよ、と言っていないので、村の中に人々はいますし、子連れの人も残ってしまっている。あるいは酪農家は経済的に追い込まれている。牛乳は捨てるけれども、牛たちに餌をやらなきゃいけない、けど出荷はできない。村人たちがたくさん残っているという風景に出会いました。

〈菅野隆幸・益枝さんの 10 年〉

そのなかで、菅野隆幸・益枝さんご夫妻の 10 年を振り返ることで、この 10 年間に何が起こってきたのか、考えるヒントになればと思います。最初に会ったのは 2011 年の 3 月 30 日。

その時にはまだ畑の小松菜を刈り落としていました。ここの畑の測定はまだしていませんでしたが、福島県内の野菜から放射性物質が検出されたということで、県内の野菜が全部出荷停止になった。でも小松菜はどんどん育つ。その時はまだ生活が続けられると思っていたので、次の作物を植えるつもりで刈り落としていたんですね。

その後、県の研修センターに避難することになり、そして 7 月ぐらいにやっと仮設住宅に入りました。大きな家から小さな仮設の部屋に来て、何もすることがない。何もすることがないというのが一番怖い。なので避難先の隣の川俣町と福島市に畑を借りて、苗を北海道から取り寄せて行者ニンニクを作り始めました。

百姓が、一回休んでしまったらとても再開なんかできないということを自分はよく知ってる、だから早くやりたいとあって、避難地に行くつか畑を借りました。もともと行者ニンニクを育てていた村の畑はもうありません。ソーラーパネルがずらっと並んでいます。戻ってもいいということで、今は飯舘村の家で暮らしていますが、村の外の畑に通っています。

こうして頑張ってる百姓が続いている人たちがいるという話をすると、「豊田は食べて応援か」と決めつける人たちがいます。「やっぱり百姓をや

りたいんだ」という人たちの生き方を肯定しない。実態を見ることもせずに、作ったものについてだけ語る。

私が伝えたいのは、こうやって生きている人たちの生き方すべてを否定するようなことが起こってしまった、それでもそこに負けずに生きている人たちがいるということです。自分の将来を捨てきれない。だから、森に葉ワサビを植えたり、行者ニンニクの種を蒔いたりしている。これをすぐに自分が収穫して売るなんて話ではない。ただやっぱり先祖から継いで暮らしてきた村を捨てられないわけですよ。

<長谷川健一・花子さんの10年>

長谷川さんは、事故当時、牛を50頭以上飼っていました。牛たちが病気にならないよう乳を搾りはするけれども、出荷できない。しかも、自前の牧草だけでは足りないので、輸入の牧草を購入して食べさせていました。収入が無くて困っている、疲弊していくんだ。だから餌を支援するなり、現金で支援するなりしてくれということを訴えていました。

その後、家族は離散し、友人は亡くなる。それが映画「遺言—原発さえなければ」を作った理由です。菅野重清さんという飯館村に隣接する相馬市の玉野地区の酪農家仲間が自殺しました。当たり前のことですが、放射能に境界は一切関係ない。「相馬市は避難指示が出ていないから、補償もないのか」なんてことをみんなが心配していた頃でした。

自殺してしまった菅野重清さんが遺した言葉は、「原発さえなければ」「残った酪農家は原発に負

けないで頑張ってください」。それをどう受け止めていいのか、悩みながら取材を続けてきました。そして酪農家仲間である長谷川さんの生き方をずっと、追いかけることになりました。菅野重清さんは亡くなる4、5日前にもう一つ言葉を遺しています。「馬鹿につける薬なし、原発で手足ちぎられ酪農家」。

長谷川さんも結局、仮設住宅に避難することになりました。それでもやっぱり自分が生まれ育った村に時々帰っては、どうしたらいいんだと悩んでいました。飯館村は事故から1ヶ月後の4月に計画的避難区域に指定されましたが、村が封鎖されたわけではないので、家に「通う」ことはできるんですね。泊まることはできません。空っぽの牛舎に牛が戻ることはもちろんない。除染した汚染土を集めた山を見て、どうすることもできない、これから先どうしたらいいのかと。

やがて時間が経っていくなかで、帰村の話が出てきます。けれど帰村するかどうかを、自分たちが決めていいのかどうか。8人家族で住んでいたのが、いまやバラバラになってしまった。村に戻ったからといって、家族が元に戻るわけじゃない。

そういう村人の悩みとか希望とかにまったく関係なく、「除染」というものが始まりました。長谷川さんの牧草地あるいは畑も、表面から土壌深さ5センチが削り取られていく。長谷川さんは、もうどうせ牛なんか飼うことないからと牛舎を解体します。

そしてソバをやるんだといって、仮設から村に通ってソバ栽培を始めました。その背後には、汚染土を詰めたフレコンバッグが山になっている。それは、ソバ栽培をやったからといって、そこに展望が開けるとか将来があるとかというのではない。ただこの自分たちが開墾して広げた農地を、そのまま森に返すようなことはしたくないんですね。だから草刈りをし、農地を保全するためにソバ作りをする。ソバ栽培によって農地を維持しようということを、長谷川さんは選びました。もちろんオレー人なんかじゃできない、仲間がいる、連れ合いの花子さんもいる。



ということで、ソバ作りをしながら村に戻りました。ちなみに最初に植えたソバの放射性物質は、1キログラム当たり 26 ベクレル。翌年度はキログラム当たり 6 ベクレルでした。全部種にしました。去年はついに測定限界以下。1 ベクレルはないだろうというレベルです。でも売れません。ということで乾麺にでもしようかといっています。一というのが 10 年経った長谷川さんの暮らしです。

＜「除染」を知っていますか＞

では「除染」とは何か。「除染」が進まないと「復興」が進まないということで、今この瞬間も双葉町や大熊町では、大規模に除染作業が行われています。ものすごい数の作業員が入っています。

＜「除染実証実験」の始まりから＞

2011 年の 12 月から除染の実験が始まりました。開始された頃は、防護服を着て高性能のマスクを付けて作業していました。で、何をするかと思ったら草刈り。屋根の水洗いもしていました。ただ、この水洗いは中止になりました。というのは、この水は屋根から雨どいを伝って下水に入り、下水から川、そして太平洋に流れ入ります。それは漁師さんたちは怒りますよね。漁師さんたちの反対で取りやめになりました。

それで実験の結果はどうだったかということ、3～4 か月後で 3～3.5 マイクロシーベルト・パー・アワーくらい。ここ東京は 0.04～0.05 ですから、60 倍、70 倍。環境省はこの実験の結果について何と言ったかということ、「除染、やりましょう」「下がったじゃない！」6～7 マイクロシーベルトあったのが半分になったんだから。でも村人にとって



は、「震災前の 60 倍、70 倍もあるじゃんか！」です。

こうして除染が全面的に開始されました。屋根洗いは屋根磨きになりました。でもコンクリート瓦だったらなかに入ってしまうので、ワイヤブラシでガリガリ削る。錆びた屋根もワイヤブラシでこする。まだ新しい、きれいな瓦は雑巾で拭く。これが除染です。

この拭いた雑巾は放射性汚染物質としてドラム缶に入れられて、中間貯蔵施設に運ばれていきます。石垣の石や壁を雑巾で拭いている作業員もいます。

本当にすることが無いと、自分たちも感じているんですね。作業員たち自身が「こんなことやっただって下がらねーよ」「なんの意味があるの？」って。

だからこそ、「負けるな山木屋！ 明日に向かって除染中！」というような旗がたくさん立ち並び。「力を合わせて除染作業中、復興への思いを込めて」。でもここは人が住んでいない地区です。「がんばります、除染作業」って、応援する人もいないんですよ。こうやって書いてもらって、作業員自身が自分たちを鼓舞している。この並び立つ旗も除染費用として、広告代理店に落札されるのでしょうか。

除染作業では、セシウムが混ざった土を集めるわけで、大量にフレコンバッグの山ができます。ものすごい大量に集まったので仮置き場では足りず、仮置き場が作られていく。仮置き場まであります。

もう一つ大切なこと。その大量に集める人たちは、最初こそ防護服なんか着ていましたが、2 年



もたった頃にはもう着ていませんでした。防護服とはいっても放射線を防護するわけではなく、放射性物質が服についたり、皮膚についたりするのを防ぐだけです。ウイルスが服に付着したりするのを防ぐ。

ところがこのフレコンバッグからは、防護服なんか関係なく貫いてしまうガンマ線がバンバン出ているわけで、実は作業員の人たちはものすごく被ばくしているんです。被ばく労働が今も続いている、「除染」という名目で。

＜「除染」の後にどうするの＞

双葉町や大熊町で今も除染は続いています。なぜならば、除染という美味しい餌をもらってしまったから。利権を手にしてしまった建設会社は、絶対に手放すことはないだろうからです。除染が終わってしまった飯館村は美味しい利権がなくなってどうしたか。壁まで雑巾がけして、落葉を集め、蜘蛛の巣まで取って……。これが今の飯館村の除染です。あるいは瓦礫を集めて袋に入れる。おそらく、これだけで何千万円もかけている。

それが終わってしまったら、次の仕事を作ればいいだけ。ということで建物を解体する。きれいに除染したところを更地にする。こういう家が飯館村だけで 1700 もあります。それでも仕事がないという「除染作業員」は出てくる。

＜「復興」ですか？＞

ということで、「復興交流館」なるものがピカピカに建つ。葛尾村、隣の山木屋地区にも復興拠点建つ。人が住んでいるかどうかは関係ない。先月ここを出発点にして、東京オリンピックの聖

火りレーが走りました。町が用意した観光バスに乗って、おばちゃんたちが応援にやってきていました。

飯館村にも復興建物が作られました。以前から「もりの駅 まごころ」という施設がちゃんとありました。なのにさらに新しく「いいたて村の道の駅 までい館」ができた。さすがに「森の駅」とはできないので、今度は「道の駅」に。すると同時に村民交流センターが建ち、すぐ近くにある消防署も新しくピカピカの建て替えられ、駐在所も新しくピッカピカのが建つ。運動場もピカピカにリフォーム。体育館もピカピカのが建つ、こども園もピカピカに、村営住宅もいっぱい、集会所もピカピカに建ちました。でも、建てて仕事が終わってしまったら困るので、さらには消防団の詰め所、屯所、風の子広場、図書室、パークゴルフ場……。この後も止まりません。これがそのたびに地元紙では、復興がここまで進んだとって報道されてきました。

2017 年に飯館村の避難指示が解除された、その日の朝刊です。「ただいま、ふるさと飯館村」という新聞広告を、全国紙に載せました。そして式典が開かれ、その準備をしているのは東京電力のボランティアだそうで、こういうところにまで東京電力の社員が来ている。当時の菅野村長は、被害者と加害者の関係ではなく、対等の関係で頑張りましょう、というようなことを言いました。そして村役場の前を 3 回目の除染が行われました。でも目には見えないだけで、不法投棄禁止の看板の立つ所にもたくさん放射性物質は捨てられているんですけどね、それは手つかずです。



避難指示が解除されて村に戻った人もいます。今現在、村民の2割以上の人に戻ってます。田んぼが再開されました。その背後には放射性廃棄物を山積みしたものがそのまま残っている。人が戻ってこないような所は、廃屋となって朽ちてゆく。

<大雷神社例大祭の報道>

避難指示解除の1年後、村の誰もが知っている大雷神社のお祭りが開かれました。通常は3年に1度のお祭りだということで、10年ぶりの大祭でした。ひょっと見ると驚きますね。子どもがいる、若者がお神輿を担いでいる。朝日新聞の記事には、「法被や武者装束に身を包んだ総代や氏子ら120人が2日間かけて村内を練り歩いた」とあります。この総代や氏子らの“ら”って誰だと思いませんか？村に若者は帰って来てません。

この担いでいる子どもたちは福島大学のボランティアです。あるゼミの学生たちが先生に連れられてやって来たそうです。毎日新聞にも写真が出ていますが、菜の花がきれいに咲いている中を、お神輿が担がれていく、行列が歩いていく。

でも実際には菜の花の向こう側には、放射性汚染土が山積みされているんです（※表紙の写真）。この菜の花とお神輿の写真だけでは、放射能に汚染されている現実が伝わらないですね。山のような汚染土の山。これらが報じられないから、なんだか皆ワクワクしてしまう。

ここを歩いている総代や氏子たちも、夜になったら避難先に戻る、村には住んでいないという実態も伝わらない。



<大沼勇治さんの看板>

それをもっと露骨にやらされていたのが、双葉町の大沼勇治さんです。双葉町の商店街の入り口にはかつて、「原子力 明るい未来のエネルギー」というアーチ型の看板が掲げられていました。大沼さんが小学生のときに書いた標語の看板です。今回、それが間違이었다と知った彼は、「原子力 破滅のエネルギー」と、自分でパフォーマンスをして、ネットに流していました。ふるさとを追われた悔しさからでもあるでしょう。ところがその看板が撤去されてしまうことになった。「撤去することが復興か、撤去しても過去は消えないぞ!」と大沼さんは抗議しています。

去年、双葉町に東日本大震災・原子力災害伝承館なるものが開館しました。館長は長崎大学のお医者さん。放射能は大丈夫ですよ、安全ですよ、といていたような人が館長となりました。

そしてこの3月、オリンピックの聖火リレーの前の日に、その看板が伝承館に常設展示されたと聞きました。大沼さんも子どもたちを連れていきました。でも、僕らの目の前でぶっ壊したのをどうやって展示するのかと思ったら、看板は展示していませんでした。レプリカでした。

<「処理水」と「除去土壌」>

国は放射能を含んだ「処理水」を海洋放出すると決めました。「処理水」を放出する。えっ、「汚染水」じゃないの？

こういう報道がなされると、新聞・テレビは本当のことを言わないといって批判はマスコミにいきます。そうして喜ぶのは、「汚染水」を流したい人たちですね。マスコミ批判だけをしてもらえば、ごまかそうとしている人たちは喜ぶ。

「処理水」と言っているのは資源エネルギー庁、そういうことが見えなくなる。で、その汚染水が流されたら一番近いところにあるのは請戸漁港。

「復興、復興」と言って、防波堤もできました、港もきれいになりました。船も戻ってきています。だけど、この漁師はどうなるの？ コンクリートものの復興だけになっていないか？ 人間の生活の復興はどこにあるのか？

同じように、ここは中間貯蔵施設ですが、運び込まれているのは「除去土壌」です。つまり放射性物質が含まれた汚染土壌。だけど最初から「汚染土壌」とは言わない。除去って何ですかね。

<風評被害>

もう一方で、「汚染水」を流すと「風評被害」が広がるから困ると言いますね。消費者庁が実施した風評被害に関する消費者意識の実態調査では、「福島県産の食品の購入をためらう」は、なお8%とあります。原発事故から10年、農水産物などの風評被害が今も続くと。

福島を代表する社会学者の開沼博さんも風評被害だと言っています。これで新聞社をぶっ叩くんですね。「また、あいつら嘘しか言わない」って。だけどちょっと待って。これで一番喜ぶのは福島県知事であり復興庁でしょう。さらにはなんと、資源エネルギー庁も喜ぶわけですよ。みんなが「風評、風評」と騒いでくれれば、実害が見えなくなるから。

例えば松茸。1個1万円くらいしそうなものもあります。でも食べられないんです。例えば、これは2018年の飯舘村の伊藤さんの調査ですが、松茸キログラム当たり2000ベクレル、3万ベクレル、1万4000ベクレルです。これは風評ではなく実害ですよ。風評だけが語られていくと、実害がまったく見えなくなるのではないかと心配しております。

もちろんこうした被害は福島だけではなく。青森県では、青森市、十和田市、鯉ヶ沢市などで天然のきのこの出荷制限が続いています。長野県でもいくつもの町で出荷が制限されている。出荷制限の基準値はキログラムあたり100ベクレ

ルですから、それ以下だと、32ベクレル、14ベクレル、4.4ベクレルと数値が出て、「安全です」「安心です」って売ってしまうのかもしれないですね。本当にいいのかどうかは、消費者が考えないといけない。福島だけの問題ではない、ということ考えた方がいいような気がします。

<震災・原子力災害の遺構>

こちらは木村紀夫さん。震災から4ヶ月後の2011年7月に大熊町で執り行われた合同慰霊祭ではじめてお会いしました。大熊町にご家族と暮らしていた木村さんは、津波で娘さんとお連れ合い、お父さんを亡くされ、この時は、まだ娘さんの遺体が見つかっていないときでした。津波と放射能災害の二重被害で、慰霊祭が開かれたのも4ヶ月も経ってからでした。

家があったところは帰還困難区域に指定されているので、人がいてはいけないところです。そんな中で娘さんを探しに通って、震災から5年6か月経ってやっと、娘さんのお骨が見つかりました。娘さんのマフラーが発見され、そこに骨が絡まっていたそうです。

そこはまだ、中間貯蔵施設に「除去土壌」として埋められていなかった。娘さんが最後に通った学校も残っています。こういう姿を震災遺構としてなんとか残せないか、つまり津波の被害も原発被害の無残さも見学できる所にしたいと、木村さんは考えています。10年前の時間が止まったような風景が、そのまま残っている。それを残そうとしている木村さんの、こうした活動を支援していきたいなと思っております。

以上です。ありがとうございました。



<p2~9 写真はすべて豊田直巳さん撮影>

★講演会の様子はYouTubeでご覧いただけます。
子ども基金のホームページ「最新情報」の中にもリンクがあります。



<https://www.youtube.com/watch?v=FGoLz1bE0TU>

「それでも『「ふるさと』」写真絵本シリーズ
(第66回産経児童出版文化賞大賞)
写真・文：豊田直巳(農文協)
チラシをこのニュースレターに同封しています。

～ 質 疑 応 答 ～

Q 除染で刈った草はフレコンバックに収納したのでしょうか？

A 基本的にはフレコンバックに入れています。あと解体した家の建材もフレコンバックに入れます。けれども袋に入れてそのまま埋めるのではなくて、草とか木は焼却場で焼却して量を減らす。ただし“焼却場”とは呼びません。“減容化施設”、容積を減らす施設という名前です。僕らから見たら焼却場です。

Q 福島とチェルノブイリの一番大きな違いは何だと思いますか？

A 今日お話ししたところで言うと、一番の大きな違いは、除染をチェルノブイリではすぐやって、すぐだめだという結論が出たから、そんな無駄なお金は使わないということでやらなかった。けれども日本はもうすでに5兆円とかいうお金を使ってしまった。大量の除染作業員に被ばく者を生み出してしまった。それからやっぱり除染した所を見ると、自分の家も除染して欲しいとみんな思うので、後戻りできない構造になってしまった、というのが大きな違いです。つまり人間の復興にお金を使うよりも、除染とか箱モノのほうに使ったというのが大きく違うんじゃないかと感じました。

Q 最初にイラクの映像が出てきて、そこで線量計で測っているとおっしゃっていましたが、その線量計はガンマ線以外も測れたのでしょうか？

A 基本的にガンマ線だけです。あそこの劣化ウランと言っているのはまさにウランで、ほとんど99.9パーセントくらいはウラン238で、半減期が45億年です。ウラン238は壊変といいますが、だんだん放射線を出しながら鉛になっていきます。その時に出るのは、ほとんどがガンマ線だと思っています。劣化ウラン弾の成分を調べるわけじゃなくて被ばくを知りたいということ、どこで劣化ウラン弾を使ったのかということを知るにはガンマ線が測れば十分と思っています。

Q 除染作業に当たった方々が放射線を浴び続けているという話がありましたが、その方々の健康状態はどうなのでしょう？

A 健康状態はわかりません。除染の現場よりも、原発事故の収束作業に関わる仕事のほうが放射線管理をしっかりとっているのによっぽど安全だと両方の現場に行ったことがある作業員が言っていました。医療関係者も除染作業のほうによっぽどいい加減だと思っております。放射線管理がいい加減な分だけ作業員の健康被害は表に出てこないと思います。

司会 「伝承館での展示場所が問題です」というご意見がきています。先ほどの、看板が下の方に置いてあるという問題ですね。それから「球美の里はなぜ閉めてしまったのですか」という質問ですが、球美の里は閉めていません。コロナの影響で今は保養ができない、ということで、コロナが落ち着いたらもちろんまた再開されます。それから「福島の子どもの健康が心配です」、「イノベーションコースト構想も、原発事故の見えない化ですね」という意見がきています。

Q 聖火リレーの際に福島へ取材に行かれたときのこと、エピソードなどをもう少し教えてください。

A その前に伝承館についても一言足しておきたいと思います。被ばくの直接の影響はないと自分で判断する年齢の方というか、まあ若い人じゃない方、自分で責任取るという方は、伝承館に行くことを、私は個人的にはお薦めです。というのは伝承館の外に伝承すべきものがまだいっぱいあるんですね。さっき見ていただいた放射能汚染物質を積んだ所とか、津波の被害を受けたままの建物とか、さっきお話しした、人が住んでいないのに町で家の解体が進んでいるとか、新しい建物がだれも住んでいない所に建っているのかが見えるんです。それから伝承館の屋上に登れば、爆発した原発の排気塔も見える。伝承館の中じゃなくて伝承館の外にいろいろ学ぶべきことがあるよという意味で、場所としてはいいところです。オリンピックの聖火リレーで、福島といっても私が見たのは初日、2日目の、しかも全部ではなく広野町、楡葉町、双葉町、浪江町、大熊町、そして翌日に飯館村と川俣町の山木屋、と見ました。

全体の印象としては、関係者は苦勞したのだろうなと思うくらいに、見ている人も応援する人も限りなく少ない。だからまったく盛り上がっていないということが見えるような場だったので、オリンピックの公式カメラマンはいかに盛り下がっていることがばれないように撮るかという苦勞をしたのではないかと思えるくらいです。それでもなんとか宣伝しなければと思った。檜葉町の商工関係者はのぼり旗をずらっと並べたり、浪江町では請戸漁港の関係者が大漁旗を振っていました。山木屋では観光バスで町から人を呼びました。何で来るか、簡単ですよ。ゴール地点に子どもたちのフォルクローレの演奏と踊りがあるんですね。そうするとその関係者、みんな来ますよね。飯館村の関係者が少なかったのは、聖火リレーをやる人が3人で、出発点の100メートルくらいだけ中学生が5人くらいしか一緒に走らないので、関係者もそれしかないから。踊りを踊った人たちがいたんですね。踊りを踊った人たちの関係者。だからそのとき福島友人が、私の耳元で、「動員、動員」と言っておりましたけれども、本当にそういうことが見えてしまうようなほど、関心はなかったように感じました。新型コロナウイルスの問題もあって、きっとそれどころではないということだと思うんですけれども。

Q 汚染水は風評ではなく実害だと思います。どうしたら汚染水の放出を止めることができますか？ 私たちは何をしたらよいですか。

A 新聞報道などで見ていると、一方でまだタンクを増設しようとしている。予備排水というか、「処理水排水」という既成事実を作って、それを市民に慣れさせるため排水はするかもしれませんが、まだ時間があるということですよ。ということは汚染水を海に流すと決めた政治家が次の選挙で落ちるといのが一番手っ取り早いのだと思うのです。それを見せつけるというか、だから今の政権が100人も落ちれば、それは、次は自分かと思うでしょうから、今年の総選挙は皆さんが声を上げてそれを一つの大きなテーマにするということかな、と思います。

Q 一市民である私たちにも責任があるとすれば、私たちはどうあるべきだったとお考えでしょうか。

A ジャーナリズム、私自身もそうです。取り返しのつかないことをしてしまいました。10年前にですね。繰り返しになりますが、本当に放射線の危険性は知っていたとと思っていましたし、原発は壊れると知っていたにもかかわらず止められなかったということで、一般市民以上に、僕は責任が重いと思っています。でも浴びさせてしまった子どもたちの健康管理という未来に対して責任をとっていきたいと思うと同時に、このような事故をこれで最後にする。広島、長崎の人たちが願ってきて、70年経ってやっと核兵器禁止条約に結び付いた。でも日本はそれに参加しないというようなひどい国だなあとはいえますけれども、それでもそこまでたどり着いた。同じように、大変困難な道だと思っても、まず被ばくさせてしまった子どもたちに対する関心と支援を忘れてはいけません。次の被ばく者を作りそうな原発をすぐに止めさせることで、新しい「新たな原発はとんでもない」というのが基本的な線かなと思っています。

Q 「東電がサッカー場を提供したJビレッジの一部が、汚染土を埋めて畑にしてその作業を中学生がやっている、キュウリを栽培している」、ということについて何かご存知ですか？

A 具体的には知りません。キュウリは栽培しているかもしれないですね、Jビレッジでは。国道6号線に桜を植えましょうとか、残念ながら、原発の事故は大したことないよ、放射能は大したことないよというほうの人たちは、先ほどのイノベーションコースト構想じゃないですけども、いっぱいお金が入るようです。原発に反対する立場から報道したりするほうは、全くお金が入らないどころではなくて疲弊していくのが現実です。お金が入るほうの人たちがいろいろやっているのだろうと思いますので、キュウリを作ってもおかしくないと思います。

司会 質問は以上です。最後に「こういう講演会をぜひパルシステム東京では引き続き行っていただきたい」、「そういう予定はありますか」というご意見、ご質問もいただきました。

未来の福島こども基金・チェルノブイリ子ども基金の報告

豊田さんの講演に先立ち、両基金より活動報告を行いました。

<未来の福島こども基金>

私たちの活動は 2011 年の 6 月より始めました。最初はチェルノブイリ救援活動の経験から、まず安全な食べ物を子どもたちに食べさせたい、という思いで、福島県内など 7 か所に食品の放射能測定器を贈るための募金活動を行いました。

その次は「保養だ」と、これもチェルノブイリの経験から学んだことです。2012 年夏、さまざまな人たちの協力のもと、沖縄県・久米島に保養施設「沖縄・球美の里」ができ、福島保養プロジェクトが始まりました。当基金に届いた国内外からのカンパは、そのほとんどを子どもたちの保養支援に回しています。しかし、コロナの影響により、昨年 2 月より保養は中止したままです。そこで、今日は保養の話と少し離れますが、「福島イノベーションコースト構想」について話したいと思います。先日発行した当基金のニュースレターに、「いわき放射能市民測定室たらちね」事務局長の鈴木さんの報告を載せています。詳しくはこちらをご覧ください。

<https://fukushimachildrensfund.org/newsletter-no21/>

福島イノベーションコースト構想、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私自身はこの中身も言葉さえも知りませんでした。訳のわからないカタカナ語で、さも立派な構想のように位置づけているこの事業、ぜひ、みなさまにも概略をお伝えしたいと思いました。

●事故を起こした原発の収束・廃炉を産業と位置づけ、それを中心にさまざまなことを一連の構造として組み立てている 3 つの柱として：

A) 双葉郡への帰還促進、B) 廃炉に関わる技術の構築、C) 人材育成

「特に人材育成は大きな位置を占めており、その先には被曝を伴う労働も待ち受けている。浜通りを中心に小学校から教育が始まり、親が考えもしない教育を受ける仕組みができてるのが今の福島県の子どもたちの教育環境なのです」と鈴木さんは嘆いています。

名前だけは知っていた『伝承館』、これもこの事業の一つだったのです。みなさんもこのことを知ってください。無駄なお金をこのコースト構想に使わないように注視しましょう。

世話人 向井雪子

(代表 黒部信一は当日体調が優れず欠席しました。)

<チェルノブイリ子ども基金>

チェルノブイリ事故から 35 年になりますが、被災地では今も病気の子どもたちが支援を必要としています。事故から数年後には小児甲状腺がんが多発しました。今の子どもたちは、血液の病気、腎臓や肝臓の腫瘍、脳腫瘍、目の腫瘍など、さまざまな病気に苦しんでいます(次頁表をご覧ください)。障がい児年金などの国からの支援は年々減り続けています。元々、農村部や、母子家庭の病気の子どもたちは経済的・精神的に苦しい状況にありました。そのうえ、昨年はコロナ禍により親が職を失ったり、収入が減ったり、通っていたリハビリ施設が閉鎖されたりなど、さらに困難な状況になっています。

初期のころ甲状腺の手術を受けた人の中には、今も首に大きな手術の傷が残っている人もいます。手術の時に声帯が傷つけられ、かすれ声になっている人もいます。

カルシウム不足、疲れやすさ、記憶力の低下など、さまざまな不調を訴えています。体調不良が原因で、学業を中断しなければならなかったり、就職が難しかったりする人もいます。そのような状況の中でも、自立しようと努力している人たち、体調が優れない中でも懸命に子どもを育てている人たちへの支援を基金では続けています。

「里親制度」により、これまでに326人の子どもが、今は53人の子どもが日本の里親からの支援を受けています。里親支援を受けていたパーシャという男の子は、脳腫瘍の手術後に足が少し不自由になり、言葉がうまく発音できなくなったことで、人と交流するのが苦手になっていました。しかし保養プロジェクトに参加し、そこで仲間と交流をしたことによりコンプレックスが段々なくなりました。笑顔が戻り、元気になってきたと、家族はとても喜んでいました。しかし2回目の保養に参加した翌年、2008年に再発してしまい、手術を受けましたが、助かりませんでした。19歳を目前に亡くなりました。お墓参りに行ったとき、お母さんは私に「こんなことがもう二度と、どこにも起きないように、日本の皆さんに伝え続けてください」と言いました。その後、日本で原発事故が起きてしまいました。チェルノブイリのことを伝え続けることが、さらに必要になっていると感じます。

事務局長 佐々木真理

◆ベラルーシ 慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」会員 病気の内訳 2021年3月現在◆

病名	2～17歳	18～21歳	合計
白血病、その他の血液病、未分化大細胞型リンパ腫	17	58	75
脳腫瘍	7	38	45
小骨盤の腫瘍、ユーイング肉腫	10	28	38
腎臓がん	18	17	35
甲状腺がん	2	25	27
目の腫瘍	5	21	26
肝臓がん	3	18	21
鼻咽頭の腫瘍	6	7	13
皮膚がん	1	3	4
神経節腫、縦隔神経芽細胞腫、ホジキンリンパ腫	10	1	11
右腎臓腺腫、神経芽細胞腫	2	2	4
単腎症、先天性腎臓疾患、糸球体腎炎	1	3	4
結節性甲状腺の腺腫	1	3	4
海綿状頸部血管腫	3	0	3
染色体疾患、ターナー症候群	1	1	2
成長不全(成長障害)	0	2	2
血管奇形	1	0	1
合計	88	227	315

※里親支援、医薬品の支援などのベラルーシの病気の子どもの支援は、この団体を通して行っています。

チェルノブイリ事故から35年 ベラルーシ・ウクライナからの便り

ベラルーシ慈善団体

「困難の中子どもたちへ希望を」

私たち団体のメンバーはみな、チェルノブイリ事故の影響により苦しんでいる子どもたちへのご支援に深く感謝しています。里親のみなさん、薬や保養のためにご寄付をしてくださっているみなさん、そしてチェルノブイリ子ども基金のみなさんに心からお礼を申し上げたいと思います。みなさんはベラルーシの子どもたちのために、たくさんのご支援をしてくれています。神がすべての人に健康と繁栄を与えてくださいますようお願いいたします。

4月26日、ベラルーシの各地ではチェルノブイリの追悼式が開催されました。ベラルーシ共和国大統領はゴメリ州ホイニキ市、ブラーギン市、ナロヴリャのチェルノブイリ事故による汚染地区を訪問しました。

私たちは1986年4月26日に恐ろしい出来事を体験しました。子どもの頃に甲状腺がんの手術を受けて一生ホルモンを飲む必要がある母親たちがいます。そして、今も子どもたちが病気になっています。これらのことを忘れていない人たちがいるということ、本当に残念に思います。

チェルノブイリ被災地の住民たちが、今そこでいかに素晴らしい生活を送っているのかを語

っている様子がテレビで流されています（事務局注：実際はそうではない）。それらを見聞きすると、私はとても恐ろしくなります。

私たちの団体では、さまざまな病気の子子どもたちが会員になっています。母親たちはみな、子どもの治療、ビタミン剤、食べ物の支援を求めています。それは心からの叫びなのです。

私を含め、腕、脚などの関節の痛みのある人、歩くことも辛い人が周りに多くいます。関節が侵されているのです。この5か月間で、私たちの団体にとって、そして私個人にとっても親しい友人5人が病気で亡くなりました。

あまり多くは書けません。私たちの国の今の状況をご存じでしょう（※）。

代表 ワレンチーナ・ポホモワ

※5月23日、ベラルーシ当局が同国領空を飛行中の旅客機を強制着陸させ、乗客の反政権メディアの創設者が拘束されました。昨年の大統領選挙の結果に抗議した多数の市民が今も拘束されたままです。



平和カンパ動画
をご覧くださいませ。

日本からの支援で購入した医薬品を手にする子どもたち。「生活協同組合パルシステム東京・平和カンパ」より購入費用の一部をご支援いただきました。



ベラルーシ

子ども健康回復センター「ナデジダ」

2021年4月26日、20世紀最悪の技術災害の1つであるチェルノブイリ原発事故から35周年を迎えました。この原子炉の爆発事故により撒き散らされた放射能は、国境を越えて文字通りの悲劇をもたらしました。さらに悲しむべきことに、この事故から25年後に再び同様の事故が繰り返されてしまいました。この時、世界中の人々は身震いしながら、日本の福島第1原発で起きた事故の成り行きを見守ることになりました。チェルノブイリを経験した私たちは、世界の誰よりも日本のみなさんの感じた痛みを理解し、分かち合うことが出来ます。この悲劇的な事故により再び思い知らされたのは、人々がチェルノブイリを忘れることがあってはならないこと、そして、このようなことはもう起きるはずがない、事故が起きたとしても影響を受けるのはその国だけだろうなどと安易に考えてはならない、ということです。

チェルノブイリ子ども基金のみなさんは、これまで長年にわたり「ナデジダ」のプロジェクトに関わり、様々な方法を通じてその維持発展を支え、活動に参加して下さいました。

「ナデジダ」は、チェルノブイリ原発事故で被災した国内各地域の子どもたちのグループを組織的に受け入れる、ベラルーシ共和国初の専門保養施設として1994年に活動を始めました。さらに1996年には、設立以来初めてとなる、チェルノブイリ原発事故で被災し、小児甲状腺ガン手術を受けた子どもたちの保養を行う国際プロジェクトを、みなさんと共同で実施しました。

1994年から2021年のこれまでの間、12万人以上のベラルーシの子どもたちが、「ナデジダ」でサナトリウム治療や保養を受けています。現在、「ナデジダ」には、様々なタイプのグループに属する子どもたちのサナトリウム治療や保養に関しての大きな経験が蓄積されています。国内唯一の完全な国立施設ではない半官半民の保養施設として、「ナデジダ」はベラルーシ国

内全体の転地保養のあり方に革新的な影響を及ぼしてきました。センターでまとめられた基本コンセプトは、健康についての一貫した考え方に基づくものであり、その教育活動や心理学的取り組みは、医学的な治療と同じレベルのものとして位置付けられています。充実した活動の下地として、「私の健康」と名付けられた総合的な取り組み策を定め、その実現にあたっています。これは子どもたちに対し、彼ら自身が自分の健康に最大限関わる機会を与え、慢性的な疾患を抱えていても社会的に活発な生活を送れるようにすることを目ざしたものです。

「ナデジダ」では、さらに別のグループへ保養対象を広げながら、世界12か国の様々な慈善団体と共同で、チェルノブイリ原発事故により被災した子どもたちのサナトリウム治療や保養のプロジェクトを実施してきました。その中には、例えば、寛解期にある同じタイプの疾患を抱えた子どもたちの保養や、恵まれない家庭や貧困家庭の子どもたちの保養、発達障害を抱えた子どもたちの保養があります。こうした取り組みは、常に高い評価を得ており、それは私たちが目指して進んできた方向が、間違っていなかったことを示すものとも言えるでしょう。

「ナデジダ」は、まさしくそれが国際共同プロジェクトであったということによってこそ、ベラルーシにおいて先駆的なものとなりえたのです。その誕生の日から「ナデジダ」というプロジェクトは、チェルノブイリ原発事故の被害を出来るだけ小さなものにしようとする国際協力の明らかな成功例であり、立場を超えた互助、相互理解の目に見える成功例として人々の前に存在しています。そして「ナデジダ」が発展を続ける道りにおいて、そのあらゆる成果を得るのに非常に大きな役割を果たしたのは、個々の具体的な人たちであり、ベラルーシの子どもたちの未来のために関わろうとする、そうした人々の働きです。例えば、資金面での援助や子どもたちの共同保養プロジェクトに関わる支援もあれば、専門家による相談、無償での子どもたちへのボランティア支援もあります。

私たちは「ナデジダ」というプロジェクトの発展に果たされてきたみなさんの貢献を常に忘れず、その有難さを深く感じています。チェルノブイリの悲劇的な事故により、とりわけ大きな被害を受けた子どもたちに心を寄せ、目を向けて下さっているすべての皆様に心からの敬意と感謝の気持ちを表します。皆様のご理解のおかげで、私たちの共同の取り組みは、この出来事の記憶を風化させず、チェルノブイリの問題が今なお喫緊の課題であること、さらにこの事故で被災した人々が今も支援を必要としているということを、今一度思い起こさせる一助となっています。そして、このことは、成長期にある子どもたちが将来の人生に対する期待を保つ上で、とりわけ重要です。

これまで時間をかけて築かれてきた我々のパートナー関係、友好関係がさらに続くことを信じ、また今後の協力関係を期待しています。

所長 ヴァチェスラフ・マクシンスキー

～「ナデジダ」チェルノブイリ 35年追悼の会～

チェルノブイリ事故から35年を迎えた日、「ナデジダ」では追悼の会が行われました。

子どもたちは事前に図書館の本を読んだり、博物館にある「チェルノブイリ原発 30キロ圏内の立体地図」（子ども基金が寄贈）を見て説明を聞いたりしながら、事故のことを学びました。放射能汚染の危険から健康を守るにはどうしたらよいのか、普段の生活では、森の中では何に気をつけなければならないのか等について話し合い、理解を深めました。

また「ナデジダ」があるヴィレイカ地区に住んでいるリクビダートル(※)の人たちへ向けて、子どもたちがメッセージカードを送りました。そこには子どもの絵とともに、リクビダートルの人々がベラルーシのために、未来の子どもたちのために力を尽くしてくれたことへの感謝と、健康を祈る気持ちなどが書かれました。

追悼の会では、子どもたちの作文や詩が披露され、子ども基金をはじめとする「ナデジダ」を支

援している海外の団体からのメッセージが伝えられました。子どもたちはキャンドルを「35」の数字の形に並べ、事故の犠牲者を追悼しました。また、子どもたちが描いた絵（一部を表紙に掲載）の展覧会、チェルノブイリ事故に関連する本の展示が行われました。



「ナデジダ」では関係者の努力で現在も保養を継続しています。写真は6月4日に滞在している子どもたち。

ウクライナ慈善団体

「チェルノブイリ子どもたちの生存」

チェルノブイリ原発事故35周年に向けての政府の計画には、政府の高官が参加するキエフでの追悼コンサートを含む多くの記念イベントが含まれていました。しかし、4月5日から30日まで、キエフ市とキエフ州では新型コロナウイルス感染対策の厳しいロックダウンが実施され、地下鉄と公共交通機関の利用は特別な許可のある場合に限られました。そのため大規模なイベントのほとんどが中止されました。また今年は、チェルノブイリ事故後初めて、親族による立ち入り制限区域内にある墓地への訪問が禁止されました（4月26日の前後数日間）。追悼行事は、ウクライナ大統領による事故が起きたチェルノブイリ原発4号炉近くの記念碑での献花、そしてキエフ市長による事故犠牲者の記念碑での献花に限定されました。

代表 リュドミーラ・ザクレフスカヤ

(※チェルノブイリ事故処理作業員のこと)



チェルノブイリの歌声 ～講演会に参加者のみなさまから～

◆豊田さんがここまで福島に通われているのは、ジャーナリストとして原発の危険性を知っていたのに止められなかったから、という言葉聞いて胸を打たれました。ニュース画面や新聞紙面のすぐそばに、フレコンバックがあったり、お祭りは動員であったり、現場ならではの写真で突きつけてくるお話しは迫力があり、知らないこともたくさんありました。◆チェルノブイリの事故とその後を見聞きすると、東京電力福島原発事故も廃炉だけでは済まないことがよく理解できました。◆写真が多くてすごくよかったです。自分の生活に追われて、気になっても何もできずにいるテーマにこうして触れるだけで励まされる気がしました。自分でも勉強し続けて、周りとも共有していかないと、と改めて思います。◆今政権のデタラメな政策に大切なふるさとを奪われた皆さんの気持を思うだけでも胸が痛くなります。箱もので何とか誤魔化そうとしている現政権に怒りしか無い。浪江町や大熊町、富岡町など知人がおり、涙無しでは聞けません。オリンピックなどもっての外で、即刻中止して福島県民の生活向上に予算を回すべきです。◆10年経っても終わっていない現実を目の当たりにして、ショックと同時に自分は何をするか考えなくては、と思った。◆長い取材でのご経験をもとに、わかりやすくこれまでのこと、そして今の問題点をズバリ語っていただきとてもよかったです。◆メディアの言葉のゴマカシをしっかり押さえ、現地に生きる方々の思いを伝えてくださり、とても心にしみました。私たちの責任として、放射能を浴びさせてしまった子どもたちの未来に責任を持ち、次の被曝者を作る原発を止めること、核兵器禁止条約を政府に批准させること、素直にやるべきことが見えてきました。◆東日本大震災から10年。もちろん復興に向けて動くことは大事だが、”復興”という言葉で現実を曖昧にする日本政府、報道を冷静に判断する姿勢を学びました。◆現地の様子に心が痛み、自分事としてしっかりと捉えていかなければと改めて感じました。今後可能ならば、リアルな講演会と並行して遠隔地から参加できる方法もとっていただ

けるとありがたい。◆言葉の言い換え・ごまかし、事故を利権につなげる構造等を豊田さんのお話から改めて実感しました。福島イノベーション構想がそうしたことをもとに展開されていることを知りました。◆イラク、コソボの兵器としての放射能と原発事故を取り上げていて、放射能とは核の問題なのだと感じました。この時代に生きている者の責任が問われていると思います。私自身ができることに取り組んでいきます。◆本当の実態を伝え続ける大切さを感じました。是非パルシステムで続けて欲しい。◆一市民として、過去に起こったことに対し、子どもの未来に責任を持つということを胸に刻みました。◆大熊町から避難しています。なぜ国や県、町が帰還を推し進めているのかよくわかりました。現状を伝えていただいていることに感謝します。子ども達が無用な被ばくをせず、健康に過ごせるように私もこれからはがんばろうと思いました。◆TVや新聞の写真がいかに嘘とごまかしが、豊田さんの「引き」や「俯瞰」での写真を見て確信しました。とても意義ある講演でした。何より写真がよかった。◆とても良い企画。当日まで申し込めるのは気楽で良かった。国は復興の良い所ばかりを強調、被曝しながら除染作業している人の事など無視している。子ども達の事も心配していないのではと感じます。日本の、地球の未来のために原発はとにかく今すぐに止めなければいけない。◆チェルノブイリは、日本の未来を教えている。◆福島の一一人一人の生活に密着した取材に説得力があった。◆我々が対峙すべき相手を再度確認した。そして、来る選挙では、原発推進の党、汚染水海洋放出に民意を無視する党には決して入れまい。◆核の恐ろしさや罪深さを再確認すると同時に、日本の在り方に対して改めて何とかしなければと思いました。チェルノブイリと福島の違いについて、除染をして無駄なお金を使い、大量の被曝者をだし、後戻りできない構造である事、人間でなく除染や箱ものにお金を使ってしまったというお話しが印象的でした。このような会を設けてくださった皆様に感謝申し上げます。



里親のページ

チェルノブイリ子ども基金では 1998 年から甲状腺手術後の子どもたちの『里親制度』を開始しました。日本の里親が一人の子どもに対し、月 50 米ドル相当を 2年間支援していただくものです。2年後に再度里子の情報をお伝えし、支援の継続・終了を決めていただきます。現在、さまざまな腫瘍病、血液病などの子どもたちが支援を受けています。『里親制度』にご関心のある方は事務局へご連絡ください。詳しい資料をお送りします。

7月から新たに里親支援を受けるベラルーシの子どもたちを紹介します。

C・アレクサンドル (2018年生まれ) ゴメリ市

先天性膀胱尿管逆流症、逆流性腎症。生後 6 か月で手術を受けた。生まれつき左腎臓がない。右腎臓は良く機能していない。定期検査を受けている。



現在、次の子どもが里親支援を待っています。

G・カリーナ (2006年生まれ) ゴメリ州ウリツカエ村

左腎臓の血管筋脂肪腫。2019年に発病、手術を受けた。半年に一度検査を受けている。



～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

里親支援が終了した子どもから、里親の方へ届いた手紙を紹介します。

B・アレクサンドラ (2012年生まれ) ゴメリ市

未分化大細胞リンパ腫（悪性リンパ腫）。化学療法を受けた。3か月に1度定期検査を受けている。

S・マルガリータ (2012年生まれ) ゴメリ市

脳腫瘍。2018年に手術を受けた。甲状腺にも問題があり、甲状腺ホルモン剤を服用している。定期検査を受けている。



Tさんへ



長年に亘り、私の人生の困難な時期に助けてくれてありがとうございます。あなたの援助がなかったら、私は乗り切れなかったでしょう。あなたは私に経済的なご支援をしてくださっただけでなく、喜びと希望を贈り、私は人の善意を強く感じることができました。

私のためのご尽力とご配慮、ご心配、ご理解、経済的支援に心から御礼申し上げます。ご健康とご多幸をお祈りします。あなたの人生が順調で、行く手に輝く成功があり、愛する人々と共にあることを願います。あなたの援助を決して忘れません。ありがとうございました。

ベラルーシ・ゴメリ市
G・マリーナより

Y・ダニール (2015年生まれ) ドーブルシ市

バーキットリンパ腫（悪性リンパ腫の一種）。2019年に化学療法を受けた。



※この原稿を書いている最中、昨年からは里親支援を受けている男の子（5歳）の病気が再発し、小児がんセンターに入院したという知らせが届きました。早く回復して退院できることを祈ります。



募金・救援状況



●募金状況 2021年2月～2021年5月 (単位：円)

	2月	3月	4月	5月
募金件数	107	106	56	31
救援寄付金	554,408	571,748	235,200	141,400
保養費	46,000	83,800	26,500	50,000
里子支援	230,660	29,800	23,120	155,180
ニュース購読費	38,000	44,000	22,000	14,000
イベント賛同金	8,000	15,000	5,000	0
合計	877,068	744,348	311,820	360,580

イベント賛同金をいただきまことにありがとうございました。おかげさまで4/24講演会を開催することができました。

●救援状況 2021年2月～2021年5月 (単位：円)

<ベラルーシ>	
◎困難の中の子どもたちへ希望を	
甲状腺手術を受けた親と子どもの保養 交通費	86,180
病気の子どもたちの保養 保険代	11,491
◎チェルノブイリのサイン	
里親支援金 2人×1年分	135,820
◎子どもリハビリ・健康回復センター「希望」	
甲状腺手術を受けた親と子どもの保養費	845,943
病気の子どもたちの保養費	1,295,742
病気の子どもたちの保養 交通費	149,183

* 2021年版チェルノブイリ救援カレンダー *

収益金 715,274円 (5/31現在)

多くの皆様のご支援、ご協力に心より御礼申し上げます。チェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援のために使わせていただきます。

※上記のうち143,054円を「未来の福島こども基金」を通して福島原発事故により被災した子どもたちへの支援といたしました。

<http://fukushimachildrensfund.org/>

★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキューウ店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリコドモキケン

(3)三菱UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金

♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

2月

代々木上原教会 教会学校
川和保育園父母の会
株式会社 音楽センター

3月

広島 船越教会
自治労日野市職員組合

4月

非核・平和を求める写真絵画展
事務局

*ウクライナへの支援金(保養費、里親支援金)は6月に送金のため、次号ニュースレター(2021年10月発行)で報告します。



【販売品】

◆マトリョーシカのマグネット/マトリョーシカのキーホルダー 各500円

◆ベラルーシ製リネンクロス サイズ(49cm×70cm) 800円

※送料別(実費)
子ども基金HPに画像を掲載しています。

事務局から

■2021年チェルノブイリ救援カレンダーご購入の方へお知らせです。以下の祝日が変更になりました。

海の日:7/19(月)→7/22(木)

スポーツの日:10/11(月)→7/23(金)

山の日:8/11(水)→8/8(日)※8/9(月)は振替休日

■絵画展 チェルノブイリ子どもたちの叫び

名古屋市民ギャラリー栄にて、3月23日～28日、チェルノブイリ事故の被災児が描いた絵画展が開催。会場募金からチェルノブイリ子ども基金へご寄付をいただきました。非核・平和を求める絵画展事務局(愛知県瀬戸市)で絵画の貸し出しを行っています。

TEL: 0561-58-7568



■「基金ニューズレター」について

寄付をくださった方には、使途の報告としてニューズレターをお送りしています。また、ニュース購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。※ニューズレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。

※ニュース発送経費を節約し、なるべく多くのお金を子どもたちの保養や医薬品に活用したいと思っております。そのため長期間、募金・カレンダー購入などのお振込みがない方へのニュース発送は停止とさせていただきます。事情をご理解いただけましたら幸いです。

■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。次回は、10月中旬の予定です。感染対策のため日程・定員が流動的ですので事務局へお問い合わせ下さい。

場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10階)

※ボランティア参加ご希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時～午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

＊ ＊ ご協力いただいているみなさまへ ＊ ＊
振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で受領確認の連絡をご希望の方に、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収証が入り用の際は振込用紙の該当欄に印をつけてください。

★編集後記★

1年越しでオンライン講演会を開催することができました。多くの方からお心のこもった感想をいただきました。ありがとうございます。

コロナ禍に加え、ベラルーシの政情が大変心配です。各国の経済制裁による物価上昇や品物不足など、病気に苦しんでいる子どもと家族にしわ寄せがいつてしまう恐れがあります。現地団体と密接に連絡を取りながら、支援を行っていきたく思います。(事務局)

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。